
大暴走！シルバーナイト物語

無目藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大暴走！シルバーナイト物語

【Nコード】

N1251BA

【作者名】

無目藻

【あらすじ】

剣聖、ダグラス・カイエンがリリな世界にいたら。
チートだろうな。

(前書き)

息抜きにちょっと

執務官、ティアナ・ランスターは窮地に追い込まれていた。

「ハアツ！ハアツ！」

マリアージュ事件をはじめ、幾多の事件を解決してきた彼女であったが、この武器密造組織の調査で単純なへまをやってしまったのだ。

見つかった彼女に密造者達は手元にあつた質量兵器　ライフルやらマシンガンやら拳銃やらを連射してきた。

魔王陛下のお陰で尋常ではない運動神経を持つ彼女ではあるが、そんなにくらでも弾丸を避け続けられるものではない。左腿に一発命中してしまった。

そして、今、命からがらその場から離れたティアナはコンテナの物陰に隠れているのだ。

「まったくもう・・・」

痛みをごまかすため、小声で口を漏らす。

「あの人ならまだしも、あんなの避けれるわけないじゃない」

ティアナはシャマルやキャロのように回復系の魔法には精通していない。医療パックに入っていたもので応急処置を施す。

あとは、応援を呼んでしまえば・・・そう考えた矢先に、聞いたくない言葉が聞こえた。

「いたぞ！あそこだ！！」

万事休す。いかにもアレな男達が各々武器を構えながらこちらに近づいてくる。

「ヘッヘッへ・・・よく見たらいい女じゃねえか」

ティアナは死ぬのは怖くない・・・いや、それなりに怖い彼女はそれよりもこの男たちに辱しめを受けることが嫌だった。

下手に動くことも出来ないため、相手をキツと睨み付ける。

「おうおう、そう睨むなよ。余計興奮しちまうぜ」

逆効果だったようだ。男達は鼻息を荒くしながら迫ってくる。ティアナも覚悟を決めた。が、その時。

「!?!」

彼女に迫ってきていた男達が胸から血を拭き出して倒れ付した。

他の男達は突如起きたことに対応できず、お互いに「なんだ!?!」

「どうした!?!」と叫びあっている。

そこへ、声が聞こえてきた。

「さて、お立ち会いの皆様、なんで俺が執務官試験に合格しないか知ってつか?」

ティアナをはじめ、そこにいる全員が声の発生源、コンテナの上を目をやった。

「俺があまりにもかっこよすぎて、試験官が嫉妬してしまうからなんだネ」

そこにいたのは、一人の男。

黒い長髪に、高い背丈。ハンサムな顔にはこれまで幾人もの淑女を夢中にさせてきた笑みが浮かんでいる。

そう、彼は紛れもなく……

「カイエンさん!」

「よお、ティアナ。アレクター!彼女を手当てしてやってくれ。あんな処置じゃすぐ化膿する」

「イエス、マスター!」

カイエンの傍らのアレクターと呼ばれた美しい女性はその触ると壊れてしまいそうなほど細い身体で六メートルはあるうコンテナを音もなく飛び降り、ティアナに完璧な処置を施す。

「くそっ!やつちまえー!」

密造団の一人が叫ぶと男達は一斉に銃を乱射した。

常人ならば蜂の巣どころか肉片すら残らないような弾幕である。

しかし、彼は常人ではない。

カイエンは嵐のような弾幕をいとも簡単に避けた。

「何!?!」

そして、かれは腕をブンツと横なぎに払う。
それは空気を見えない刃として相手を切り刻む業、真空切りである。ソニックフレード

哀れ密造団の一角はいとも簡単に切り刻まれてしまった。

「なななんじゃああいつはあ！？バケモンかよ！」

カイエンは生き残りの方へ向き直り、言い放つ。

「どうする？この俺に一発でも銃弾を当てることができたら天位をやるわ」

彼らはバカではない。

決着はつき、密造団は武器を投げ捨てた。

「カイエンさん、どうも、ありがとっ」

地上本部の応援が駆けつけ、次々と拘束される密造者を見ながらティアナは言った。

「ナニ、騎士つてのは君主と、美しき婦人のために戦うもんだ」
それを聴いてティアナは赤面する。

「そ、それよりもどうです！？もう夕方ですし、この後一緒に食事でも。今日は奢りますよ」

カイエンは口笛を軽く吹いて「では、お言葉に甘えるといたしますかネ」と言った。

ところが、ここでアレクトーがカイエンに言う。

「でも、マスター。さっき電話がありました、直ぐに地上本部へ出向するように、と・・・」

カイエンはピタツと硬直した。

ティアナを助けるためとはいえ、一騒動やらかしたのだ。

この後待っているのは美しい婦人との楽しいひとときではなく、始末書の山との一夜であることは明白である。

「ティアナ、すまないけど、急用が入ったヨ」

「えっ？」

そう言うとカイエンはアレクトーを連れ、これまた人間ばなれし

た速度で走り去っていった。

「とんずら・・・」

ティアナは呆れたが、カイエンを嫌いになることはなかった。

新暦0078年、ダグラス・カイエンは今日もミッドチルダを駆け抜ける。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1251ba/>

大暴走！シルバーナイト物語

2012年1月3日01時52分発行